



防防日第8001号  
24.6.12

沖縄県知事 仲井眞 弘多  
宜野湾市長 佐喜眞 淳 殿

防衛大臣 森本 敏



MV-22 オスプレイ配備について (回答)

知基第190号・宜基渉第18号(平成23年6月24日)により照会された標記について、防防日第10359号(平成23年8月29日)及び防防日第15061号(平成23年12月19日)により回答したところですが、米国政府から環境レビューの結果が示されたことを踏まえ、別紙のとおり補足的に回答します。

添付書類：別紙

問 1 9 市街地の中心にある普天間飛行場へのMV-22配備において、特に考慮した安全管理の具体策があれば、ご説明いただきたい。

- 米海兵隊としては、普天間飛行場に限らず、どこの飛行場においても、またMV-22に限らず、どの航空機においても徹底した安全管理を行っている旨米側から説明を受けている。
- また、環境レビューでは、普天間飛行場における安全性の評価に関し、
  - 換装されるCH-46とは異なり、MV-22を操縦するパイロットは広範囲でシミュレータを使用することとなり、このシミュレータは飛行運用の全ての面における訓練を提供し、徹底したシミュレータ訓練により、パイロットのミスによる事故に関連したリスクは最小限になること
  - バードストライクは、人口密度の高い区域で航空機が墜落した場合に地元の住民へ損害を与える可能性があることから安全上の懸念であり、米海兵隊は、普天間飛行場におけるバードストライク事故計画を作成し、警報システムを運用するなど、積極的及び継続的な取組を引き続き維持することなどが記載されており、引き続き徹底した安全管理が行われると認識している。

(北部訓練場への影響)

問 2 3 MV-22 配備により想定される北部訓練場の自然環境への影響について、ご説明いただきたい。  
特に、CH-46 より強い下降気流と火災リスクを伴う高温排気による自然環境への影響については、調査の実施を含め、詳細にご説明いただきたい。

- 米海兵隊が実施した環境レビューにおける北部訓練場の自然環境に与える影響は、以下のとおりである。
- MV-22 中隊は、空域及び訓練場に適用される全ての運用及び安全手順を遵守する。エンジンデフレクタの使用や着陸帯での着陸手順、沖縄の湿潤な気候に鑑みると、火災の危険性が高まることはない。また、植生や野生動物及びほとんどの保護種に影響が及ばない、もしくは最小限になると分析されている。
- しかしながら、保護種であるヤンバルクイナとカラスバトについては、着陸地点近くの森林境界域で巣作りや休息する場合もあることから下降気流により、以下の影響を受ける可能性がある。
  - ヤンバルクイナについては、MV-22 の下降気流が障害となり、巣を放棄する可能性がある。加えて、ヤンバルクイナは一晩中樹上で休息することから、仮に、夕方の時間帯に発生したMV-22 の下降気流により、休息を妨害されるようなことがあれば、再び樹上で休息することができなくなり、地上で捕食される危険に晒される可能性がある。
  - カラスバトについては、巣は小枝で作られ、木の上か木の穴のなかに置かれる。ふさわしい隠れ場となる森林域に巣を作る傾向にあるが、森の端沿いに巣を構える傾向があるので、MV-22 の下降気流により影響を受ける可能性がある。

- この保護種に対する影響を踏まえ、保護種の影響に対する軽減策として、以下の措置を行う。
  - ヤンバルクイナについては、繁殖期が始まる頃と中間期に巣作りやとまり木として使用する場所を特定する調査を行い、巣が発見された場合、その着陸帯の運用を30日間停止し、とまり木が確認された場合、追加調査によりとまり木が使われなくなったことが確認されるまでの間、夜間（日没後）の運用を中止する。
  - カラスバトについては、繁殖期が始まる頃に巣作りする場所を特定する調査を行い、巣が発見された場合、その着陸帯の運用はすべての巣立ちが確認されるまで、停止する。

問 2 4 北部訓練場ヘリパッドN 4 地区は、県道 7 0 号線に隣接しており、強い下降気流による走行中のオートバイ等への影響が危惧される。これら、県道 7 0 号線への影響について、ご説明いただきたい。

- 米海兵隊が実施した環境レビューにおけるMV-22の下降気流が道路に与える影響は、以下のとおりである。
- MV-22の近くで作業をする要員へ与える影響を特に対象とした1998年の海軍航空戦センター航空機課による調査では、毎時47マイル（秒速約21m）かそれ以下の風速の下降気流のときはほとんどの人が前方に歩くことに支障が無く、毎時47マイルから58マイル（秒速約26m）のときには歩行は困難であったものの、安全上の問題は生じなかった。
- MV-22からの下降気流が風速毎時47マイルに達する最大の距離は、機首からの角度が60度の方向で300フィート（約91m）である。
- 米国農務省によれば、防風林の効率は、初期風速、風源からの距離及び防風林の植物の幅・高さ・密度に左右されるが、植物の植生が十分であり、風源からの距離があれば、防風林は風源からの風速を75%減少させることができるとされている。
- 上記を踏まえ評価したところ、北部訓練場を含め、MV-22の使用が計画されている既存着陸帯で公共の道路から3

00フィート以内に位置する着陸帯は8箇所あるものの、そのいずれにおいても、森林が防風林の役目を果たすため下降気流の風速が時速47マイル以下に減少するか、その気流が発生する方向に人や車両が存在する可能性が極めて低いため、影響はほとんどないものと評価されている。

- 御指摘のN4地区のLZ17については、公共の道路から400フィート（約122m）離れているため、影響はないと評価されている。

問27 政府は、普天間飛行場、キャンプ・ハンセン、北部訓練場などにおいて、MV-22配備によって生じるであろう騒音や環境への影響について、事前に調査する予定はあるか、政府の認識を伺いたい。

- 政府としては、MV-22配備によって生じるであろう騒音や環境への影響について、できる限り事前調査等を行うことに努めてきたところである。
- これまでに、普天間飛行場周辺の騒音の変化の分析や、下降気流の自然環境や県道70号線への影響の分析、また、MV-22のホバリング時やエンジンテスト時の騒音データを米国において収集するなど、政府自ら、種々の事前調査等を行ってきたところであり、その結果については、これまでの回答において既にお示ししたところである。
- また、米海兵隊においても、普天間飛行場、キャンプ・ハンセン、北部訓練場などにおいて、MV-22配備によって生じる騒音や環境への影響について事前に調査し、詳細な分析を行ってきたが、今般、その成果として、環境レビューがとりまとめられ、その提供を受けたところ、政府として、沖縄県や宜野湾市のみならず、その他の関係自治体に対しても、その内容を丁寧に説明してまいりたい。
- 米海兵隊が実施した環境レビューにおける騒音や環境への影響は別添のとおりである。

別添：環境レビュー エグゼクティブサマリー